

厚生省推薦、文部省選定

さようなら

蚊とはえさん

2 巻

あたゝかくなると、きまつて出てくるのが蚊とはえです。いくら追つても殺しても、祖先伝来の蚊とはえは、たえません。鶏は蚊に攻められトサカから血を流したり、暑い間は卵もろくに生みません。

牛の乳も出が悪く、馬だつて豚だつて、サシバエや蚊に攻められてみんな神経衰弱なのです。

お隣の中国のハエも蚊もいなくなつた土産話は有名ですが、日本にも蚊もはえもない村や町がふえてきました。

私たちは村の婦人会でそのような村を見学しましたが、あんなことなら私たちにもできると、保健所の人に来てもらつて、蚊やはえの発生について勉強しました。蚊やはえをなくするには、私たちの周囲の蚊やハエの製造工場(発生源)をなくしてしまわなければなりません。

しかしいざ蚊とはえのボク滅に乗出してみると、厄介なのは蚊もはえも平氣な人達です。頭の古い人はえがたからないようじやごちそうじやないといばつています。漁村にも、はえが多いと景氣がいいと喜ぶ氣分があるそうです。

次に問題になるのは発生源に薬をまく費用で、家畜や堆肥や肥溜の多い農村から蚊やハエをなくそうなんてバク大な金がかゝつて、それこそお金を捨てるようなものだということです。しかし、共同で購入すれば一戸当年間五百円位ですむのです。

ついに男の人たちも、青年団も小学生までが協力して、全村一致の體勢が出来ました。私たちがはじめた仕事がここまでできた喜びで、私たちは力一ぱい噴霧器をにぎりしめました。

村中、家の内も外も清掃と薬剤撒布が終つて、まず驚いたのは村が見ええるようにきれいになつたことです。はえも蚊もノミもほんとうにいなくなつてしまいました。老人たちがとてもよろこびましたよ、赤ん坊の天国になりましたよ。



16ミリ版 売価 30,000円

長サ 750呎 上映時間 21分
35ミリ版 全2巻 (1875呎)

企画 全国地域婦人団体連絡協議会
協賛 中外製薬株式会社
製作 母と子の桜映画社

母親プロ・友の会通信



誕生から一人歩きへ

意欲的な企画を抱えて

昭和三十年六月二十九日、日比谷の市政会館第一会議室でココの声をあげた桜映画社は、ジャーナリズムから母親映画プロの通称を頂きましたが、生れたての赤ちゃんと、「さようなら」とはええさん」でようやく一人歩き、第二作、三作は元氣な少女の歩き、間もなく元氣で賢いお母さんになるつもり、オ二作は、

百人の陽気な女房たち

全3巻

で、目下製作中、十月末完成の予定です。蚊とハエのいない生活の都市版で、主婦のグループの地域連帯意識の目ざめを、明るいユウモアのある劇形式で描くもの。

第三作。

家族計画

全2巻

受胎調節を中心とする、工場労働者の妻たちの新生活運動を、力強いドキュメンタリー(記録映画)として描く。脚本準備中。十一月末の完成予定。

オ四作。

育児、教育シリーズ

No.1

は、十二月末完成予定というふうに、第三作からは断然がんばって婦人向教材映画月一本の完成計画で進んでいます。次に、その名の如く母親プロで、子供のためによい映画を作つて下さいという多くの声に応える劇映画の企画も練つていきます。

「さようなら蚊とはええさん」

推せん の言葉

厚生省環境衛生部長 楠本正康

ちかごろ新生活運動ということが方々で論議されている。そして、その考え方やねらいにはいろ／＼のものがあられるらしい。しかし、私はこの運動が何か具体性のあるものであつてほしいと思つている。だれしもが共通に関心をもつていて、地域社会の人たちが共同して実践すれば僅かな注意ですぐに効果があり、しかもその実践の場を通して地域社会の連帯の氣持が養われ、自然のうちに社会の改造が行われていくような仕事であつてほしいと考えている。こんな氣持から蚊とはええの駆除は実践的な新生活運動として、うつつのテーマであらう。ところが、この度地婦連が作られた「さようなら蚊とはええさん」はこうした新生活運動のあり方がよく表現されていて、新生活運動はむずかしい理屈よりもまづ、身近なむりのない実践にあることが、明るい朗らかな画面を通してはつきり理解できる。私はこの映画が、住みよい明るい社会を作り上げていく無言の力となることを期待している。

婦人の集りは

映画を中心に

株主さんの一人、茨城県水海道小学校長の猪瀬先生が、店開きしたばかりの会社に訪ねて下さいました。水海道市では七千人の学童が月十円の教材費でフィルムを買うので、すでに備えつけの映画は七十本と六校六台の映写機があるそうです。

そこで、学校がPTAと婦人会に呼びかけて、婦人向の映画も買い、夜は学校の映写機は空いているので、子供たちの見る映画と合せて、映画を中心に婦人のつどいをつくれたら、学校としてもうれしい。ぜひやりますよ、といわれました。

名古屋市には、三千人の主婦たちが、一グループ二十人以上で、教育映画を見てそこから問題を引出して話合うつどいをもつ三年もつづけている家庭映画会があります。映写機は学区毎にあるのを借りて、それこそ茶の間でやるので、マジメな映画を一、二本、お母さんの技士で映写して、あとの話が映画のおかげで具体的になり、誰も発言できて、とてもいいそうです。

また各地の公民館でやつている婦人学級(母親学級)では、月一回のつどいですが教材には映画が一番よるこぼれるという声もほうほうで聞きます。

これからの婦人の集りは、いつでもよい十六ミリ映画を中心に致しましょう。それもあるだけ手近かな小グループにしたいものです。そうするには、どうしたらいいか。近くの学校や区や市、県の視聴覚ライブラリーに相談してみして下さい。桜映画社では、製作のかたわら、婦人向きの教材映画にどんなものがあるかも調べています。